2008 年度 小委員会活動成果報告

（2009 年 2 月 14 日作成）

小委員会名	雨水利用システム規格小委員会	**主 査 名**：神谷　博 **就任年月**：2007 年４月
所属本委員会 **（所属運営委員会）**	環境工学本委員会 （水環境運営委員会）	**委員長名**：井上　勝夫 **主 査 名**：小瀬博之
設　置　期　間	2007 年 4 月　～　2009 年 3 月	
設　置　目　的 **各年度活動計画** **（箇条書き）**	・雨水の利用、循環についてのアカデミックスタンダードの作成。 既刊本「雨の建築学」「雨の建築術」を踏まえ、その計画理念、技術の規格化を目指す。 ・初年度：準備学習、事例研究、課題抽出、課題検討とまとめ ２年度：アカデミックスタンダード（AS）のＷＤ作成、ＷＤの検討と関係者調整、報告会の実施と報告書作成	
委員構成 **（委員名（所属））**	**委員公募の有無**：有	
	神谷　博（㈱設計計画水系デザイン研究室）、村川三郎（広島大学）、村瀬　誠（墨田区役所）、屋井裕幸（雨水貯留浸透技術協会）、佐藤　清（テクノプラン）、熊谷　清（(財)ダム水源地環境整備センター）、栗原秀人（(財)下水道新技術推進機構）、高橋　伸輔（国土交通省）、中臣昌弘（文京保健所）、ユルゲン・ヴィッチシュトック（慶応大学講師）、谷田　泰（タニタハウジングウエア）、大沢幸子（フリージャーナリスト）、早坂悦子（ＮＰＯ法人雨水市民の会）、山田岳之（糺ノ森環境政策研究所）	
設置 WG **（WG 名：目的）**	設計ＷＧ：雨水規格の設計に関わる部分の検討 事業ＷＧ：雨水規格の事業に関わる部分の検討 制度ＷＧ：雨水規格の制度に関わる部分の検討	
2008 年度予算	65,000 円	**委員会 HP アドレス**：http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s21/

項　　目	**自己評価**
委員会開催数	１２回（年度内計画を含む）
刊行物（シンポジウム資料等は除く）	
講習会	
催し物 **（シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等）**	１．第 32 回水環境シンポジウム「国際シンポジウム：雨水利用建築の規格化とその効果」（2 月 20 日及び 21 日実施予定） 参加者数（予定）１５０名 資料名：「国際シンポジウム：雨水利用建築の規格化とその効果」
大会研究集会	なし
対外的意見表明・パブリックコメント等	シンポジウム開催の新聞記事によるＰＲ シンポジウム開催時の参加者の意見収集
目標の達成度 **（当初の活動計画と得られた成果との関係）**	１．ＷＤの作成：年度末に完成予定 ２．ＰＲ：2 回のシンポジウムによる効果あり ３．印刷物：製品便覧を年度末までに完成予定
委員会活動の問題点・課題	１．3 つのＷＧの活動のばらつき：次のステップでは絞り込む ２．委員の出席率：よく出席できるメンバーを揃える ３．全体討議の回数：次のステップではＷＧの作業を絞り込む

2008 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	・雨水の利用、循環についてのアカデミックスタンダードの作成 雨水利用システムの規格化ということに一定の抵抗があることも予想されたが、むしろ規格づくりへの期待が高かった。国際シンポジウムで締めくくることで最新の国際動向を踏まえた位置付けを行えた。 アカデミックスタンダード（AS）の内容は、既刊本「雨の建築学」「雨の建築術」に続く本として出版する方向性も定まった。 ・ＷＤの検討と関係者調整、報告会の実施と報告書作成 準備学習段階では、予定通り課題の整理を行い、議論を交わすことができた。事例研究については、製品便覧の作成としてまとめることができた。メンバーに各方面からの参加を求めたことにより、事前の関係者調整を行ったが、本格的にはＷＤを持って次年度以降の作業とする。 報告会は、各年度の最終にシンポジウムを実施し、最終年度は国際シンポジウムを開いた。これをもとに報告書を作成し、ＣＤ、ＡＳへとつなげていく予定である。 ・普及に向けた状況 建築学会として雨水利用システムの規格化に取り組んでいることが知られるにつれ、その波及効果も出始めている。2008 年 8 月には、全国雨水ネットワークが発足し、雨水に関わる産官学民全ての関係者が連絡をとる場ができたが、それには建築学会の動きが大きな役割を果たしている。 社会的にも環境への取り組みが重視されるようになり、新聞等に取り上げられるなど、注目されている。